

黒沢尻の地名の由来について

北上市立中央図書館
近世近代文書調査員 菊池國雄

1. はじめに

地名はその土地の名称である。日常の社会生活を営んでいく上で地名は言葉や文字と同じように、欠かすことのできないものである。

地名の起源は言葉と同様に古い。アイヌ語には文字はないが、アイヌ語地名が残っている。我々が現在使用している地名の中には、縄文・弥生・古墳時代にさかのぼるものもあると思う。

地名は地形・水・植物などから起こった自然地名と生活や産業、町割など人為的活動から生じた文化地名（歴史地名）に分類することができる。従って地名は土地の顔であり、時代の顔でもある。

黒沢尻町は明治22年（1889）4月、町分村と里分村が合併して誕生した。

昭和29年（1954）4月黒沢尻町は近郊の6村と合併して北上市となった。その中心地である黒沢尻は人口増加と相まって、都市化の進展、市街地の拡大が急激に進行した。

昭和37年5月、「住居表示に関する法律」が施行された。それに基づいて各市町村は条例を制定して住居表示をおこなうことになった。黒沢尻町の新町割と新町名の施行は、同41年7月から始まり、同63年（1988）7月まで22年間にわたって実施された。それが現在の住居表示である。

数年前から、かつて町内にあった消えた地名（町名）が懐かしいという声が聞かれるようになった。地名の由来やその町域をたずねる市民も多くなった。その要望に少しでも応えたいと思って平成21年春から折々に調査をおこなってきた。調査対象の項目を選定するにあたっては次の（1）～（3）の資料等を参考にして、53項目をリストアップした。（「4. 自然地名と文化地名の分類」参照）

- （1）「黒沢尻町区長改選・区画変更」昭和19年（1944）1月9日 和賀新聞
- （2）「住居表示整備事業の最終答申」昭和41年（1966）2月15日 広報きたかみ
- （3）「第2次住居表示整備事業、新町割り・町名決まる」昭和42年1月5日 広報きたかみ

各項目の地名（町名）の解説には「起立」と「消滅」の年代（一部推定したものを含む）、現行の住居表示などを記述した。

今回の講座は以上の取り組みに基づいて展開する。

2. 黒沢尻の遺跡分布と地名の起源

(1) 縄文・弥生時代

縄文遺跡は常盤台や梨子山などの村崎野段丘、和野などの金ヶ崎段丘、北上川右岸や和賀川左岸の自然堤防に分布する。

弥生遺跡の牡丹畠は北上川の自然堤防にある。

これらの地域は戦後に市街地化が進行し、現在は常盤台・上野町・黒沢尻1丁目～4丁目と表示されている。

(2) 古代

土師器（はじき）・須恵器（すえき）が出土する地域で、小鳥崎・上野町・常盤台などの村崎野段丘や鍛冶町南・清水小路・和野などの金ヶ崎段丘の縁、北上川の自然堤防である川岸地区に分布する。黒沢尻・方八丁・古城場・川岸といった地名は古代に起源をもつと思われる。黒沢川流域の曾山（そやま）も開田されていたと思われる。

(3) 中世

和賀氏の頃の黒沢尻野馬（放牧地）は、黒沢尻中心市街地のある金ヶ崎段丘面であったと考えられる。また、上野・下野などの村崎野段丘も野馬所であり、これらを管理する人達が居た屋敷が孫屋敷（まごやしき）であった。有田・蒲谷地堤（つつみ）といった開田地名も中世の起源であろう。

(4) 近世

黒沢尻の中心市街地である本通りは江戸初期に奥州街道が開通して本町（ほんまち）が町割されたのが起源である。81年後に新田町（新町）も造設された。和賀川渡船場が置かれ舟場（ふなば）集落が形成された。黒沢尻は町分村と里分村に二分されて統治されることになった。

(5) 近代

調査した53項目の地名の大半は明治から大正期に起立した町名である。花屋町・新穀町・九年橋は明治期であったが、多くは大正の後半に町内会を結成して幸町・栄町・末広町などの瑞祥地名（ずいしょうちめい）を付けたと思われる。

(6) 現代

「常盤台」や「大通り」は昭和30年代に誕生したが、大部分は同41年7月から実施した住居表示整備事業によるものである。

3. 各時代の主な地名の由来

(1) 古代の地名

ア. 黒沢尻 (くろさわじり)

「黒沢尻」という地名は、前九年合戦（1051～62）の始終を記した「陸奥話記」に出てくる。1062年9月、源氏と清原氏の連合軍が安倍正任の「黒沢尻柵」を攻めたという記事である。

弘仁2年（811）に和我郡が設置された。郡を統治した地方官（郡司）の役所が置かれた所が黒沢尻の方八丁（ほうはつちょう）でそこを黒沢川の尻であることから黒沢尻という代表地名にしたのだと思われる（北上市史2巻）。

中世和賀氏の時代、応安2年（1371）に黒沢尻氏に関する記録が見える（碑貫状聞老遺事）。黒沢尻氏は黒沢尻地域を支配し、安倍館を居館としたと考えられている。永禄元年（1558）3月の和賀氏領内の検地で黒沢尻村は2807石となっている。江戸時代になって黒沢尻本町が市で賑わいを見せるようになった万治元年（1658）、町分村と里分村に2分して統治することになった（岩手県管轄地誌）。

黒沢尻という地名の由来は「クロサワジリ（畔沢尻）」で草の密生した湿地だという（日本地名大事典上）。また「黒沢」は「黒土の沢」「水が淀んで鉄鏽水の流れる湿地の沢」を意味するという（岩手の地名百科）。

現存する「黒沢尻」住居表示区域は、北上中学校付近が黒沢尻1丁目、それより北へ同2丁目、同3丁目と続き北上市営細越住宅付近が同4丁目となっている。

イ. 方八丁（ほうはつちょう）

岩手県内には「方八丁」地名が13ヵ所あり、北上川流域に集中している。これらの遺跡から出土する土師器や須恵器は平安初期のもので、胆沢城（802）・徳丹城（812）からの出土品と器形や手法が酷似している（前沢町史上）。

黒沢尻の方八丁は南は川岸観音、西は諏訪神社、北は小鳥崎南面丘、東は北上川。中央部の古城場あたりは開田されて実証はむずかしいが、土壘や濠跡が残っており、北上川沿いの畠地には土師器・須恵器片が散在している。弘仁2年（811）、和我・稗縫・斯波郡が置かれた。これらの各郡に「方八丁」という地名がある。条里制をもつ兵営的な性格と考えられる（北上市史2巻）。

黒沢尻の方八丁は、現在の表示では川岸3丁目の川岸観音堂と諏訪神社を結ぶ線から北側、国道107号付近までの区域と考えられる。

(2) 中世の地名

和賀地方の中世史は、奥州藤原氏が滅亡した文治5年（1189）から豊臣秀吉の奥羽仕置によって和賀氏の時代が終焉した天正18年（1590）までの401年の歴史である。この間和賀氏が和賀郡を統治した。

初代の和賀氏は義行である。仁治4年（1243）に死去、所領を3男2女に譲渡した。誰にどこを譲渡したか家系図に載っている（資料1）。

黒沢尻分の新田郷・渭山（曾山）郷・黒沢尻野馬、江釣子分の岳田（おかだ）郷は二女子に分与された。

ア. 新田（あらた）

現在の有田（ありた）で北鬼柳・黒沢尻に広がる地域。「荒田（あらた）」とも書く。中世に新しく開いた田畠のこと。古代には「新田（にった）」、近世（江戸期）は「新田（しんでん）」と呼んだ。現在の「有田町」付近である。

イ. 渭山（そやま）

現在は「曾山」の文字を当てている。町分の北西から旧江釣子村鳩岡崎・北鬼柳に続く広い範囲の地域で、黒沢川に沿う両岸の低地と微高地が入り組んだ地形をなしている。渭山・沢山（さわやま）は、湿地の中にある小さな山形の地形のことである（岩手の地名百科）。黒沢尻分の曾山は、現在、町分2地割と3地割に属している。

ウ. 黒沢尻野馬

黒沢尻野馬は既に述べた（2の（3））ように、金ヶ崎段丘面で水利の便が悪く、耕地化など開発が後回しになった地域である。現在の黒沢尻中心市街地で、本通り2丁目・同3丁目、諏訪町・花園町・本石町・新穀町辺りと推定される。

エ. 岳田（おかだ）

北鬼柳字岡田（おかだ）付近で、鎌倉末期の記録に「岡田」とある。「岡（おか）」は小高い土地の意味で、古代の農村集落は田地より一段高い丘に立地した。その集落名が岳田（おかだ）である。

（3）近世の地名

江戸時代の始め、大茅原であった荒野に町割りをして74軒の町場を創設した。これが「本町（ほんまち）」の誕生である。それから80年余を経て奥寺新田開発に関りをもった人達の新田町（のちに新町と呼ばれる）44軒が町割されて、宿場町としての黒沢尻の基盤が整った。

万治年間（1658～60）頃から本町の市日が賑わいを見せた。奥州街道を境界にして西側を町分村、東側を里分村に分けて統治することになった。「町分」と「里分」地名について述べる。

ア. 町分（まちぶん）

黒沢尻村は和賀氏の時代から一村であった。前述したように市日の賑わいが盛んになった万治元年、奥州街道を境にして西側を町分村、東側を里分村に分けて治めることになった。

「町分」という地名は、市が立つ場所とその町裏などを含めた町方（まちかた）の集落という意味から生じたと思われる。町分村の範囲は、奥州街道沿の町場とその西側の地域で、江戸時代後期の字地（あざち）は北は「上野（うえの）」から、南は和賀川北岸の「上川原（かみかわら）」まで21個所に区分されていた。（資料2）

黒沢尻は明治22年（1899）町分村と里分村が合併して町制を施行した。以降北上市になる昭和29年（1954）まで黒沢尻町大学町分と表示された。

現在「町分」を住居表示としている地区は、町分1地割（上野）、同2地割（蒲谷地）、同3地割（柳田）、同4地割（羽場）、同7地割（柳原）、同18地割（山田）、同21地割（上川原）の一部で農耕地の多い地域である。（資料2、その1）

イ. 里分（さとぶん）

万治元年（1658）、奥州街道の東側を里分村としたことは前述した。

寛政年間（1789～1801）に成立した「邦内郷村志」には、里分村216軒、うち里分30軒、川岸156軒、本宮8軒、北畠7軒、古城場3軒……などと記されている。里分は黒沢川下流域の中心地とも読みとれる。

古代には「人々が集まって住む所」を「里（さと）」・「むら」と呼んだ。「方八丁」は条里制をもつ兵営的性格であったことからすると、里分地名は6町四方（36町歩=36ha）の地積をもつ条里制の「里（り・さと）」からヒントを得た名称であろうか。

明治22年里分村と町分村が合併して黒沢尻町が誕生した。以降北上市になる昭和29年までは、黒沢尻町大字里分と表示された。なお里分村の字地は20個所であった。（資料2、その2）

（4）近代、現代の地名

ア. 新穀町（しんごくちょう）

新穀町は黒沢尻の中心街丁場（じょうば）から西側に展開する繁華街である。明治5年（1872）の黒沢尻町屋敷地書上絵図面によると、丁場は十字路で、奥州街道に道幅1間（1.8m）余の作場道が交差し、東側の諏訪町と結ばれていた。

新穀町通りが現在のようになり、丁場と北鬼柳藤木間の新道として開かれたのは明治29年（1896）である。同31年10月には県道（平和街道）に昇格した（江釣子村史）。

町名の由来は和賀平野の米作地帯へ新道が開け、米穀商人が多く居住するようになったことから名付けたのであろうか。

明治31年5月施行の区長設置定則によれば、新穀町は黒沢尻町12区・区長は町分

の佐藤又助であった（同31年黒沢尻町議会一件綴）。

昭和41年7月の住居表示整備事業で、新穀町は新穀町1丁目（旧新穀町の一部）と同町2丁目（旧新穀町・鍛冶町・黄金町の一部）となった。

イ. 常盤台（ときわだい）

北上市の新住宅街となる旧国産軽銀工業株式会社跡地西側一帯の名称を「常盤台」と名付けることになった。これは常盤の如く永遠に栄えるという意味で名付けられたものである（和賀新聞）。

常盤台地名の由来は、当地開発の功労者元衆議院議員高田弥市が国政に携わっていた頃、住まいされた東京都板橋区常盤台の地名にちなんで命名されたものである（常盤台地名由来之碑）。

北上市常盤台は昭和42年7月の第2次住居表示整備事業によって、常盤台1丁目（町分1地割・里分1地割・里分3地割の各一部）、同2丁目（町分1地割の一部）、同3丁目（町分1地割・藤沢18地割の各一部）となり、更に同62年7月には同4丁目（町分1地割・藤沢18地割・同19地割・同20地割の各一部）が施行された。

4. 自然地名と文化地名の分類

調査・収録した黒沢尻の地名（町名）は53項目である。これらを自然地名と文化地名（歴史地名）に分類することを試みた。

（1）自然地名

地形・水・植物などから生じた地名

ア 樹木に関する地名

青柳町 小林町 桜木町

イ 野・原に関する地名

上野町 川原町 中野町 柳原町

ウ 湿地・低地に関する地名

蒲谷地 曽山 山田（資料3）

エ 河川・清水地名

黒沢尻 清水小路 広瀬川（資料3）

以上 13項目

(2) 文化地名

生活・農耕・商工業・信仰など歴史的・人為的地名

ア 農耕地名

有田町 北畠 里分 新町（新田町）

イ 職業に関する地名

鍛冶町 岳駒町 丁場 新穀町 花屋町 本石町 孫屋敷 町分

ウ 交通に関する地名

大通り 大橋 大曲町 川岸 九年橋 珊瑚橋 舟場 平和通り
細越 本通り 本町

エ 城柵地名

古城場 方八丁

オ 信仰地名

諏訪町 天神 若宮町

カ 瑞祥地名

曙町 老松町 幸町 栄町 新富町 末広町 高砂町 常盤台 若松町

キ 分類しなかった地名

角町 芳町 芳片町

以上 40 項目

5. 興味をひく地名（資料3）

ア 広瀬川（ひろせがわ）

イ 山田（八股=やまた）